姉妹・友好都市ニュース

SISTER CITIES NEWS

協会報

第 23 号

平成6年11月15日発行

編集・発行

茨木市国際親善都市協会

'94 ジャパンウイークで大岩太鼓のパフォーマンス

目次

'94ジャパンウィークへ市民85人参加……P 3
小豆島内海町青年団演劇部茨木公演……P 4
'94オリーブマラソン体験記……P 5
ミネソタ州日本語村だより……P 6
ダンスでミ市の子ども達と交流、安慶市環境衛生視察団……P 7
「国際交流の集い」盛会、ドイツでの生活、寄付紹介……P 8

'94 AMERICA JAPAN WEEK へ市民

オープニングセなどで茨木の4俳句コンテスト

文化・スポーツの交流イベントを通して日本の素顔の紹介と、アメリカとの友好親善、相互理解を図ることを目的に、本市姉妹都市ミネアポリス市で盛大に開催された「'94ジャパンウィーク」へ5月26日から6月4日の間、茨木市大岩太鼓保存会(峯義昭会長)32人、松若流日本舞踊寿百洋(ともひろ)会(義若耕司代表)18人、茨木市民謡・民舞同好連盟(田辺昌男会長) 10人、全国大正琴普及会茨木菊穂会(政岡紀代子代表)12人、市民親善訪問団 (井岡千代子団長) 13人が参加しました。山本市長と小矢田議長も激励のため出席され、オープニングセレモニーと茨木デーを盛り上げていただきました。

参加者は、ミネアポリス空港内の「ようこそ」とひらがなで書かれた垂れ幕の歓迎をうけ、空港での歓迎レセプションに出席しました。

28日、ジャパンウィーク開催の明暗を分ける最初の催し「オープニングセレモニー」は、2800人の観客で埋めつくされたステートシアター (州立劇場) で開催されました。開会式典の後、大岩太鼓の鼓動に始まり、寿百洋会の恋吹雪道成寺や、民謡・民舞同好連盟の津軽三味線、菊穂会の上を向いて歩こう等、茨木市参加4団体による記念公演の後、ネイティブアメリカンの太鼓のリズムと歌による民族ダンスで会場は盛り上がり、最後に大岩太鼓の雄壮な演奏で開会式の幕を下ろしました。

29日は午後2時からインスティチュート・オブ・アーツ(ミネアポリス市美術館)で「茨木デー」を開催し、太鼓、日舞・民謡、大正琴の披露が3元同時開催され、前日とは一味違った演者と観客の距離のない交流を行いました。美術館関係者は、約3000人の観客を前に「美術館始まって以来の人出です」と笑みを浮かべて話してくれました。

また「茨木デー」の会場でMICCA(ミネアポリス市・茨木市文化協会) が募集し、本協会の文化

ステートシアターでの大正琴の演奏

日舞のオープニング「さくら さくら」

85人参加

レモニー、茨木デー団体が公演。また、の入賞作品を表彰。

民謡民舞同好連盟による演奏

オープニングセレモニーで山本市長とミ市議長

部会で選考した俳句コンテスト入賞作品が表彰されました。206点のなかから選ばれた最優秀作品は以下のとおりです。

【成人の部】

Decayed hollow space
A burst of green, life appears
The seed miracle

James L.

(朽ちた世に緑の生命種子奇跡)

【高校生の部】

The sun shines so bright
To provide flare and glare
To all those beach bums

Lee C.

(陽光の輝く中に浜で遊ぶ人々)

【小学生の部】

A hummingbird caught
In a crystal spider web
In the mist of fog

Mickey D.

(霧淡くハチドリとらわれるくもの糸)

その後引き続きミ市ベルトン市長出席のもとでパーティーが開催され、参加者全員に友好市民の証をいただきました。夕刻にはメジャーリーグのミネソタツインズの試合で山本会長（茨木市長）が始球式を、プレゲームショウとして大岩太鼓が鼓動を行ってドーム球場いっぱいにジャパンウィークの成功を祝っているような大きな拍手がおこりました。

姉妹都市活動室　青少年活動室

英語力、国際感覚の向上をめざしている「姉妹都市活動室」では、より多くの人に参加していただき、国際交流のすそ野を広げようと会員を募集しています。

例会は、月２回、外国人ゲストを迎えての講演会や研究会などを英語で行っています。

〈例会〉　木曜会　第１木曜日午前10時～
　　土曜会　第３土曜日午後２時～
〈年会費〉正会員　2,000円(18歳以上)
　　準会員　1,000円(中・高校生)

万博公園でピクニック、クリエイトセンターでクッキング。“We Are Friends!”では、様々な国の人達と一緒に、英語でゲームをしたり、季節のお祭を楽しんだりしています。

原則的に毎月第４日曜日の午後２時から、福祉文化会館で行っていますので、友達を誘って気軽に遊びに来て下さい。会費は無料です。

12月はクリスマスパーティー
１月はハッピーバレンタイン
２月は世界の音楽を楽しむ予定です。

小豆島内海町青年團（演劇部）茨木公演

去る７月30日㈯、茨木市市民総合センター（クリエイトセンター）センターホールにおいて、姉妹都市・内海町からの青年団演劇部公演があり、「ふるさともとめて花いちもんめ」と「記念撮影」の二題が公演されました。

この公演は、演劇部が昭和39年に創部されてから30年が経過したのを契機として、小豆島に住む人たちのことや、島の文化、生活などを姉妹都市の茨木市の人々にもっとよく知ってもらい、心温まる交流を行いたいとの希望により、実現しました。

この日公演された「ふるさともとめて花いちもんめ」は島の秋祭りをめぐる青年たちの葛藤を、「記念撮影」は就職のためや、自分の可能性をためすために島から出て行く子どもとその家族の思いを演じたもので、どちらも島のことが題材にされています。

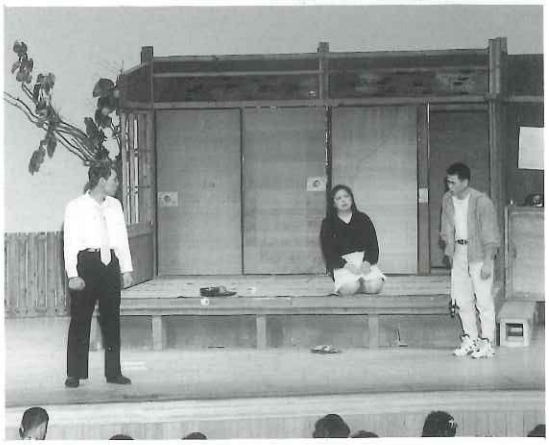
当日は、「茨木フェスティバル」と重なりましたが、約300人の市民が鑑賞されました。演劇部員の皆さんは、高速道路の渋滞でかなり疲れていた様子でしたが、いざ舞台が始まると堂々とした演技を見せてくれ、観客は郷土を愛する内海町の青年達の素朴で迫力あふれる演技に感動し、小豆島の青年達の生活や生き様に大きな拍手を贈っていました。

公演後、演劇部代表の照木ひでひろ氏から、次のようなメッセージが届きました。

「茨木市の皆さん、ありがとうございました。つたない私達の演劇発表でしたが、舞台を通じて、とても気持ちのいい交流をさせていただきました。私たち内海町青年団演劇部は、“島のことを、島の言葉で、島の青年が演じる”を合言葉にして、島に住む喜びや悩みを舞台化してきましたが、会場を埋めた茨木市の皆さんの暖かい拍手に支えられて、楽しい演劇空間を生み出すことができ、うれしく思いました。これからもさらに深い交流ができますことを願ってやみません。お世話いただいた茨木市、茨木市国際親善都市協会を始め、多くの市民の皆さんに深く感謝申しあげます。」

本協会としても、今後、この公演が契機となり、両市町で文化交流をはじめ、様々な分野で多くの市民の方々が参加する温かい交流が、より一層進展することを願わずにはおられません。

「花いちもんめ」の大団円



「記念撮影」の１シーン

'94オリーブマラソン体験記

「年々歳々花相似たる」自然界と違い、人間50半ばを過ぎると気力・体力ともに下降していることを肌身で感じます。

人事異動を機になんとか体力をカバーしたいと思いジョギングを始めて４年、今年も職場仲間34人とともに小豆島のオリーブマラソンに参加。勿論我がチームの中では最年長で、年寄りには負けられないとターゲットにされています。

坂手港をスタート(ゴール)にして全国各地から5000人のランナーが集結。スタート前はどの顔も緊張。張りつめた気持ちが号砲とともに一斉に走り出します。道路は全幅ぎっしりとランナーで埋めつくされ、延々と大きなうねりになって帯状に続きます。5000人が各々の思いを胸にオリーブ薫る五月晴れの中、青い海、青い空、新緑の美しい山を背に沿道の温かい声援を受けて黙々とゴールを目指します。ゼッケンが左右に揺れ、追い越す者、追い抜かれる者、荒い息使いが耳もとを過ぎ、どの顔も苦しさに耐えながら走り続けます。

でも、一度オリーブマラソンに参加すると何故か毎年走りたくなり、今回で三度目の挑戦です。このオリーブマラソンは地元関係者の行き届いた気配りとともに不思議なほど感動を呼ぶのです。

今年は残念ながら体調を崩し、自己ベストに３分以上遅れましたが、また来年も再来年も体力が続く限り、小豆島の自然を満喫して走りたいと思っています。（入江浩一）

前列右から２人目が筆者

舞台終了後花束をもらって

協会会員募集

本協会では、姉妹・友好都市交流をはじめ、国際交流に熱意を持っておられる方々の入会を心からお待ちしています。会員には、協会報や協会が催す交流行事のご案内をいたします。

〈年会費〉個人会員（一般）　2,000円
（学生）　1,000円
団体・法人会員　一口5,000円

〈申込先〉協会事務局
（市役所３階自治振興課国際交流係
☎22－8121内線2143）

ミネソタ州日本語村だより

英語を教えている仕事の関係上、日頃から言語の習得過程に関心がありました。日本語教師認定の資格も取り、いつか日本語も教えてみたいと思っていましたが、この夏ちょうどその機会を与えられ、ミネソタ州の日本語村にカウンセラーとして参加しました。

その日本語村などコンコーディア大学主催の語学村は、毎年開催され、10か国の村があり、７才から18才までの生徒が参加する全米でも有数の夏期語学研修キャンプです。

参加者は、キャンプ生活を通して実際に即した言葉を学習します。なかでも印象深かったのは、異文化という環境で、言葉が通じないために起こる数々の問題を、子ども達が擬似体験することによって、異文化理解の必要性や意思疎通の重要性を認識できるよう授業が工夫されていたことでした。

また、キャンプ期間の前後に、ホームステイでお世話になったミネアポリス市文化協会の方々との交流も、心に残る思い出となりました。

（高田礼子）

今年の夏、縁あってミネソタ州でアメリカの小学生から高校生にキャンプ生活を通して、日本語と書道を教える機会を得ました。私は、上級クラス６人に日本語を、約120人の子どもには書道を教えました。

キャンプ場でヘビやモグラを捕まえたり、高校生でも７歳の子ども達とクイズ問題に挑戦し、めいっぱいプログラムをエンジョイしていた彼ら。ベッドに入っても消灯時間を守らず私の手を焼かせた彼ら。ある夜やっと消灯と思いきや、今度はあちこちのベッドから蛍の光まがいの懐中電灯が点灯し始めます。明日のテストに向けての試験勉強です。24時間寝食を共にして、「やる時にはやる!!」という集中力をまざまざと見せつけられました。英語が母国語の彼らは、それで世界を渡り歩けるにもかかわらず、日本語習得にこれ程熱心です。私は彼らを寝かすことを諦め、明日のテストにいい点を取ってくれることを祈る気持ちになり、そしてささやかながら、私が国際交流に貢献しているという自負にいつのまにか深い眠りにつきました。（藤井基弘）

キャビンで担当の子ども達と

習字を指導する筆者

ダンスで ミ市の子ども達と交流

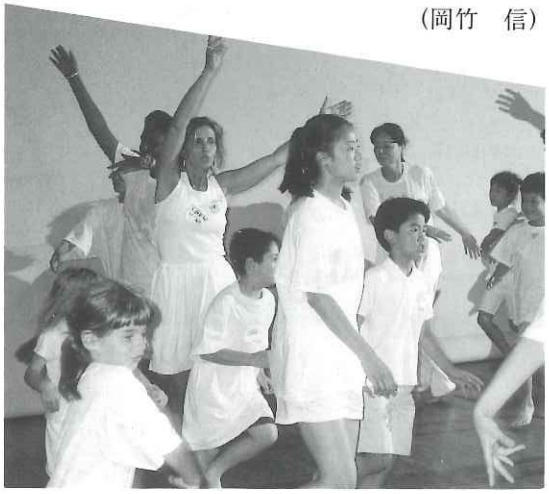
言葉が通じなくてもダンスが出来れば友達になれる、これが10年前の初渡米以来の私の持論です。そして、ミネアポリスには、1990年の来阪から親しくお付き合いしている、モダンダンスグループの代表者ハイジさんとその仲間がいます。これらがきっかけとなり、この夏「ダンスを掛け橋に子ども達を交流させてやりたい」という私の夢が実現し、アメリカの子ども達と共にダンスを創作することができました。

午前3時間はダンスのレッスン、午後はピクニックや市長表敬訪問など、充実した10日間の訪問はもちろん、連絡をとりあいながらの約半年間の準備の楽しかったこと。

最終日、「帰りたくない」、「もっといたい」、という声の中で、ミ市の子ども達みんなで取り組んだダンスの成功に涙ぐみ、新しい友達との別れに大泣きして、本当に楽しかった10日間を締めくくりました。

帰国後も、子ども達の多くが、住所交換をしていたらしく、写真や手紙でずっと交流を続けており、「また機会を作って逢いに行こう」、「できれば茨木にも来て欲しい」、「次回はこんなことをしよう」と、もう次の夢がふくらんでいます。

（岡竹　信）



最終日のダンス発表

安慶市環境衛生視察団

公害がはなはだしくなり、環境保護運動が盛んな昨今、中国の友好都市・安慶市の環境衛生視察団一行5人が去る7月18日(月)から本市を訪れました。

環境保護や衛生学の専門家からなる視察団で、市内では大池ポンプ場と下水処理場、環境衛生センターのゴミ処理とし尿処理、新築の茨木保健所、保健医療センターを視察しました。

市外では大阪・森ノ宮の大阪府公害監視センターを訪れ、見学中に光化学スモッグが発生したこともあって、監視室でのデータ測定、実験作業に関心を寄せていました。

また、吹田の阪大病院では、設備の整った病室や休憩所、受付、それにカルテの自動検索・発送システムを視察しました。

以上の見学先で団員から出た質問は、府と市の管轄区分、工場の汚水問題、水道の検査、伝染病予防、保健衛生の予算、健康診断制度、保険制度、病室料金、病院経営など多岐にわたるものでした。

また、多忙なスケジュールをぬって中央図書館、川端康成文学館、西河原市民プールを見学、茨木の文化的な面にも触れていただきました。

今回の成果を、安慶市で環境保護活動や都市衛生に活用されることを願っています。

(上)下水道中央処理場で、(下)西河原プールにて

「国際交流の集い」盛会!!

さわやかな秋風が吹き、すっきりと晴れわたった9月18日、3回目を迎える国際交流の集いが茨木市立青少年センターで開催されました。

午前10時30分からの外国人対象のバザーには、前回と同様に、タオルや皿などの日用品から自転車、冷蔵庫など大型の物までたくさんの品物が提供され、茨木市周辺在住の外国人留学生等の一助となりました。

午後からの交流会では、日本人、外国人あわせて約320人が参加し、日本や外国の芸能が披露されました。

交流会の幕開けは日本舞踊で、会場があでやかな雰囲気に包まれた後、今度は神秘的なマジックショウがくりひろげられました。その後、コロンビアやインドネシア、フィリピン、インドからの参加者が母国や日本の歌を歌い、アメリカからの参加者の指導のもと、皆でエアロビクスを楽しみました。青少年活動室のメンバーも途中から参加し、色々な国から多くの人が集まっているのだからと、皆が友達になれるようなゲームも行われ、交流を深めました。最後は、輪になって炭鉱節を踊り、交流会をしめくくりました。

交流会のひとこま

バザー会場

寄付

本市の国際交流事業の推進のために、次の方々から温かいご寄付をいただきました。ご厚意に心からお礼申し上げます。（5月～10月、敬称略）

〈市へ〉 6月　国際ゴルフ株式会社（100万円）
　　8月　(宗)辯天宗冥應寺　（120万円）

ドイツでの生活

この度、青少年の海外でのスポーツ・文化交流事業を推進するため設立された「社団法人茨木カンツリー倶楽部青少年国際交流助成金」の交付を受け、7月20日から8月12日までドイツ北西部へ全国のスポーツ少年団の代表者の一員として派遣され、現地でホームステイをして直接彼らの生活に触れて来ました。

エレベーターに“閉まる”のボタンがありません。レストランで注文してから1時間も待たされ、日本人はイライラしているのに、ドイツ人はその間おしゃべりを楽しんでいます。文化・習慣・価値観が異なっている為、日本の常識が通用しないということはわかっていたつもりでしたが、実際に体験してみて、強くそれを感じました。

ホームステイ家庭と

異国での生活は想像以上に毎日が新鮮で、この夏、とても貴重な経験ができました。(松尾美紀)